

# FDコンサルテーションを受審して

大学教育研究センター副センター長 都市建設工学科 教授 杉井俊夫



## FDコンサルテーション 受審の経緯

平成21年に設立された高等教育開発（大学における教授法の改善、カリキュラム開発、組織改革、教職員の能力開発等）のための専門家団体である日本高等教育開発協会（JAED: Japan Association for Educational Development in Higher Education）が、平成23年8月29日に立命館大学で第1回高等教育開発フォーラムを開催した。同協会に機関会員として加盟している本学は、当該フォーラムにおいて公開FDコンサルテーション（事例研究）受審の勧めもあり、本学のFD活動について報告、会員をはじめとする他大学からのご意見を伺う機会を得た。

## FDコンサルテーションの 概要

A、Bの2会場に受審4校が2大学ずつ分かれ、受審大学から30分間のFD活動報告の後、コンサルティングスタッフ（8人）を中心にフロアからも質疑を受ける形で30分程度のコンサルテーションが行われた。中部大学はA会場で、大学教育研究センターから4人、本学関係者としてCumocシステムの企画、製作に関わった富

士通からも1人参加し、本学以外には30人ほどの参加者があった。

コンサルテーションでは、報告時間30分を使ってあらかじめ配布した資料を活用しながらFD活動概要の報告とCumocを使ったデモンストレーションを行った。Cumocは、会場の参加者に紹介することを目的として、同時に本学FD活動に対する評価を会場参加者から得ることも目的として実施した。以下にコンサルテーション時の意見・質問内容とCumocで得られた結果を報告する。

## 意見・質問内容と回答

**Q1: 「授業サロン」を実施して、その効果はどのように得られているか。**

A1: 本学では、授業コンサルテーションを行う代わりに「授業サロン」を実施している。この取り組みは、授業運営に関する専門家がいないくても実施でき、参加者は授業を公開することで新たな緊張感を持ち、見学者は専門分野以外の他者の授業を参観することで新たな視点を数多く見だしている。そのことは、「授業サロン」の意見交換時に活発な意見交換がなされることから判断でき、同時に終了後の学部間を越えたFDネットワークづ

くりにも大きく貢献している。

**Q2: 貴学はマイクロレベルのFD活動に力を入れているようにみえるが、カリキュラム改善などのミドルレベル、組織改善・整備のマクロレベルの活動はどのような状況か。**

A2: 本学ではミドルレベルおよびマクロレベルの活動は、FD活動の決定、運営において中心的な役割を担うFD委員会の所掌事項ではないため、FD活動の評価点検項目には含めていない。しかし、マイクロレベルで得られた情報等も参考にFD講演会やFDフォーラムでのテーマに取り入れるなど、種々の企画でその一翼を担っている。また、組織改善・整備のマクロレベルの情報を得つつ、全学の動きと同調したFD活動を展開している。

**Q3: 「Cumoc」での匿名性によって学生から意見が出やすい利点は理解できるが、匿名性による弊害はないのか。たとえば、匿名だから不真面目な回答が出る悪影響や匿名の場でしか発言できない学生を育てることにならないか。**

A3: 現在のところ、匿名性の弊害は確認されていない。むしろCumocを使うことで学生はより本当のことを伝えてくれるようになったという教員からの報告がある。また、匿名の場でしか発言できない学生を育てているとは考えていない。自分や他の意見を知ることができ、少しでも自分が授業に参加しているという意識を高め、徐々に意見を出しやすくすることを目標としている。自由記述欄も設けたことで、学生からの意見が多くなったことや自由記述欄に自らの氏名を書いて意見を記述する学生もいることから、市販されているクリッ



コンサルテーションにおける質疑の様子

カーシステムとは異なり、より“学生の生の声”を収集するという目的も有したシステムと考えており、学生が授業に参加する姿勢を促すツールとして使用している。

**Q4：教育情報公表、認証評価とFD活動を三位一体の運営体制づくりを目指している」とあるが、教育情報公表はFD関連部署が行うべきなのか、またそうなった経緯を教えてください。**

A4：大学教育研究センターは、30年ほど前の前身組織時代から本学の教育・研究情報に関するデータ等を収集してきており、今回の教育情報公表ではそれらの収集している情報の多くが内容的にも重複していたために担当部署となった経緯がある。また、認証評価の第2クールでは、FD活動の評価点検等が大きなウエートを占めると考えられることもあり、当センターがこれらを含めて教育システムのPDCAサイクル形成等も念頭に置きながらさまざまな検討を進めていく担当部署となった。

**Q5：「授業サロン」の実績をみると同じ人が何回も参加しているように見えるが、どうしてか。**

A5：「授業サロン」では、グループ参加者の構成を考えるにあたり、必ず過去の参加者が入って全体の取りまとめの役を担っている。「授業サロン」の趣旨を踏襲していくためには、このことが重要な鍵となっ

ている。

**Q6：貴学では「授業サロン」などのさまざまなFD活動を展開しているが、どの取り組みに最も力を入れているのか。**

A6：本学では、FD活動の個々の取り組み（ツール）に力を入れているというよりも、FD活動の重点目標である「魅力ある授業づくり」を推進していくことを念頭に考えて活動している。

**Q7：5年間のFD活動重点目標として「魅力ある授業づくり」を挙げられているが、その後はどのような方向に進む予定か。**

A7：全学で合意されているわけではないが、「魅力ある授業づくり」は、教育現場において探求し続けなくてはならないテーマと考えており、5年経過後も本学のFD活動の基本的な重点目標として継続し、今後はこの目標に沿ったより具現化した取り組みを計画していくなど、より明確に進めていくことが望ましいと考えている。

**Q8：数少ないスタッフで、また兼任教員のみで多くの取り組みを活発に展開しており、(Cumocでの投票では、80点に投票したが)95点というところである。あえて言うなら、学生を取り込んだ授業改善等、FD活動についての取り組みを検討されるとさらに良いと思う。**

A8：これまでもFDフォーラムや授業サロンに学生を参加させた実績

はあるが、今後ご指摘いただいた、学生を取り込んだFD活動も検討していきたい。

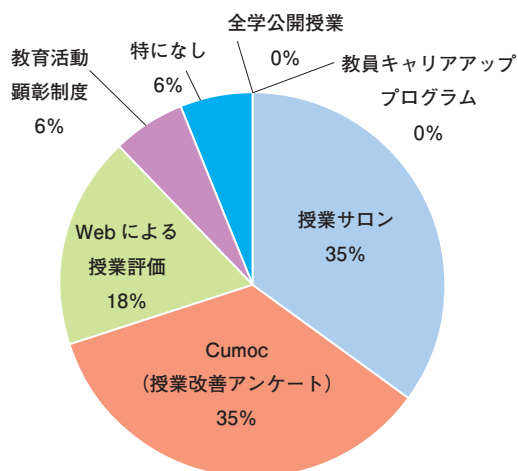
## Cumocを使ったデモンストレーションと評価

FDコンサルテーション参加者約30人のうち、会場で17人がCumocに参加した。中部大学所在地の認知度を含めて3つの質問を出題した。下記【図1】【図2】に本学FD活動の第三者評価に相当する設問2、3の結果を報告する。

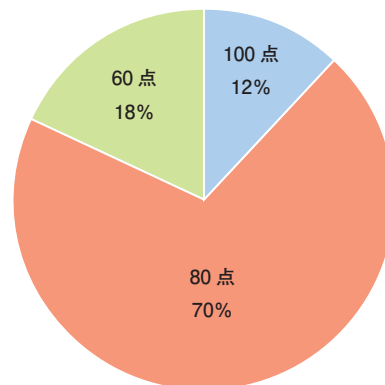
設問2：「中部大学でのFD活動で、最も興味を持った取り組みはどれですか？」

設問3：「中部大学のFD活動を点数で評価してください。」

参加者は、「授業サロン」と「Cumoc」に関心が高く、続いて「Webによる授業評価」に興味を持った結果が明らかとなり、大学教育研究センターが予測していた結果とほぼ同じであった。また、本学のFD活動の採点評価では、100点が2人、80点が12人、60点が3人という結果となり、現在の本学におけるFD活動の方向性が正しいものであることを確信させる結果を得た。今後は、これらの結果に甘んじることなく、現在のFD活動を継続、充実させていくこと、また少しでも多くの教員が自らFD活動に参加するよう促すことが重要であると再認識する機会となった。



【図1】最も興味を持った取り組み



【図2】FD活動の評価点